

実践報告

COC デイの実践の効果と課題

宮田 美和子

日本福祉大学 健康科学部

佐藤 大介

日本福祉大学 全学教育センター

Effect and Issue of the Event of the Center of Community Program

Miwako MIYATA

Computer Science Course Department of Human Care Engineering Faculty of Health Sciences

Nihon Fukushi University

Daisuke SATO

Inter-departmental education center, Nihon Fukushi University

Keywords : COC, インクルーシブ教育, ふくし^{*1}

Abstract

The aim of this study is to examine the effects and issues of the program implemented on the COC Day. The lecture and the symposium on inclusive education were delivered via zoom for students of the on-demand course "Fukushi of Chita peninsula". As a result, many of the students were able to deepen their knowledge of inclusive education. In addition, their interest "Fukushi" increased, and their desire to participate in some kinds of activity increased. On the other hand, they were reluctant to receive information about volunteers by e-mail. The issues is to create a support system that can connect their interests and concerns to practice.

要旨

本研究の目的は、COC デイに実施したプログラムについての効果と課題を検討することである。オンデマンド科目である「知多半島のふくし」の履修者を対象にインクルーシブ教育に関する基調講話とシンポジウムを Zoom で配信した。結果、履修者の多くがインクルーシブ教育に関する知識を深めることができた。また「ふくし」に関する興味が増し、なんらかの活動にも参加したいという意欲が増した。一方で、ボランティアなどの案内をメールで受信することについては消極的であった。興味や関心を実践に繋がられるような仕組みを作ることが課題と考えた。

背景

文部科学省は、2013年度から大学等が自治体と連携し、地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める大学の機能強化を図ることを目的に「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）を推進した¹⁾。本学でも2014年度より大学COC事業の採択を受けて3キャンパス（美浜、半田、東海）の立地する自治体を拠点に、大学と地域が連携し地域連携教育、地域志向の研究、社会貢献の3つの分野で取り組み様々な成果を上げており、事業補助期間後も形や頻度を変えながら取り組みを継続している²⁾。

COCデイは本学全7学部の学生が履修可能であるオンデマンド科目「知多半島のふくし」の第14・15講の中でポストCOCの取り組みの一つとして位置付け、2講義分のみ対面授業として実践している。毎年度「担当学部」を決め、担当学部のCOCデイ担当者（COCデイ担当者）と「知多半島のふくし」の科目担当教員（科目担当者）で協議しながら、担当学部及びキャンパスと関連する地域課題をテーマに基調講話やシンポジウムなどを実施してきた。また実施当初は対面で開催されていたが、COVID-19の感染拡大以降はZoom配信での開催となっている。

2021年度のCOCデイは健康科学部が担当であった。今回は2021年度のCOCデイの準備から実施内容までをまとめ、開催内容と開催後に行なった学生のアンケート結果から、2021年度のCOCデイの効果と課題についてまとめる。

方法

開催に向けた準備と開催当日のプログラム内容、参加者アンケートの実施方法について説明する。

1. 開催に向けた準備

1) テーマ決めと全体スケジュールの決定

まずCOCデイ担当者と科目担当者ならびに日本福祉大学全学教育センターのCOCデイ担当者（全学教育センター担当者）でZoomにて打ち合わせをした。テーマ決めと全体スケジュールの調整が主な目的である。テーマについてはCOCデイ担当者が構想を示し、全体スケジュールについては科目担当者から過去のCOCデイの開催時期や実施内容の情報提供があり、ディスカッションの中で開催日程の候補日を決め、全体スケジュールの

具体的なイメージを作っていた。

企画第1案は、健康科学部の所在地である半田市の「ふくし」に焦点を当てられるようにし、かつなるべく各学部の学びと接点があり多職種連携の理解を深める中で自身の専門領域からの関わりについて考え、将来何らかの形で「ふくし」に携わりたいと履修者が思えるような内容にすることを目標にした。テーマは「医療的ケア児の学校教育」とした。医療的ケア児の学びの現状と課題を理解できるような基調講話を設け、その後シンポジウムを開催し、実事例を通じてリアルに学べるようにすることを考えた。

2) 登壇者の決定とプログラム内容の修正

COCデイ担当者が基調講話の講師、シンポジウムのシンポジストを調整した。登壇の打診は訪問して行った。大学の紹介、全学部の紹介、オンデマンド科目「知多半島のふくし」についての説明、COCデイについての紹介、2021年度テーマ、依頼したいプレゼンテーション（プレゼン）の内容などについて説明した。

登壇の依頼をした際に「医療的ケア児に限定せず、外国人なども含めた学習に困難を抱える児童に範囲を広げてはどうか」、「医療的ケア児の半田市での受け入れは現在準備の段階であるため明確に伝えられないことも多く、学生が消化不良にならないか不安がある」、「学校だけでなく登下校や宿題をするなどの家庭をはじめ学校外での支援も教育を受けるベースになるため、フォーマル・インフォーマルサービスを含めた連携についても伝えてはどうか」、「学校教育の話だけでなく、就学前からの関わりも理解してもらいたい」「ライフステージに合わせて支援も調整が必要であることを理解してもらいたい」などの意見があり、COCデイのテーマを「障がい児³⁾の学校教育支援について考える」と幅広い範囲を示すような形にし、インクルーシブ教育の理念や実践が伝わるような形のシンポジウムにすることに修正し、もらった意見を反映させる形とした。

最終的に基調講話の講演者は半田市障がい者相談支援センター センター長の加藤恵氏、シンポジウムは5名のシンポジストで構成した。5名の内訳は教育現場からは半田市教育委員会の中井康友氏、愛知県立ひいらぎ特別支援学校中学部主事の池田真悟氏、当事者家族から荒木尚美氏、学生の立場から健康科学部福祉工学科情報工学専修4年の川角香南子氏、相談支援の立場から半田

市障がい者相談支援センターの法安佐栄氏，シンポジウムのコメンテーターとして基調講話に続き加藤恵氏に依頼することができた。

3) 当日までの調整

基調講話とシンポジストが決定し，COC デイのテーマとおおよその方向性と内容が決まった段階で，基調講話の講演者とシンポジスト，COC デイ担当者，科目担当者，全学教育センター担当者を交えて打ち合わせをした。主に登壇者のプレゼンの準備内容を共有し合い方向性にズレがないかを確認した。

登壇者は普段から学校教育支援で連携をとりあっている間柄であったこともあり，その後のプレゼン内容の調整や確認などは個別でやりとりをしてもらい，発表内容を完成していった。シンポジウムでのプレゼンに慣れていない登壇者に関しては，スライド作成，発表原稿のチェック，発表の進め方の確認など細かくやり取りをしながら準備を進めていった。

4) 配布資料，原稿等の集約

基調講話，シンポジウムの登壇者が用意した配布資料については科目担当者が窓口となって集約した。また全学教育センター担当者が各登壇者の資料を一つにまとめて当日の配布資料として準備した。

5) 当日の最終打ち合わせ

COC デイの当日に Zoom の接続状況の確認をし，最後に本テーマで学生に理解してもらいたい事を共有し再確認した。シンポジストのうち1名は，Zoom の利用に不安があったため半田キャンパスでの Zoom 接続となった。接続環境の調整，部屋の手配などは半田事務室からの協力を得た。

2. 実施プログラム

2021 年度 COC デイの最終決定のスケジュールを表1に示す。テーマは「障がい児の学校教育支援について考える」で，開催日時は 2021 年 12 月 23 日（木）13：35～16：45（半田キャンパスでの 3，4 限）とし，構成は 50 分の基調講話と 80 分のシンポジウムとした。基調講話の内容はインクルーシブ教育に必要な合理的配慮とチーム支援，ライフステージを見据えた支援について事例を提示しながらの講演である。シンポジウムは 5 名のシンポジストそれぞれに 10 分程度のプレゼンをしてもらった。1 人目は半田市教育委員会の中井康友氏で，プレゼン内容は就学支援の実際，教育支援委員会の設置と役割，小中学校における特別支援教育の実際についてである。2 人目の登壇者は愛知県立ひいらぎ特別支援学校中学部主事の池田真悟氏で，特別支援学校についてと個々に応じた支援内容を紹介し，合理的配慮についても説明があり，関係機関と連携した教育相談や地域におけ

表 1 COC デイ当日プログラム^{*3}

時間	プログラム	内容
13:35	開 会 趣旨説明 進 行	全学教育センター 佐藤 大介 健康科学部 准教授 宮田美和子
13:40	基調講話 (50 分)	半田市障がい者相談支援センター センター長 加藤 恵氏
14:30	休 憩 (10 分)	
14:40	シンポジウム (80 分)	<シンポジスト> (各10分程度) 半田市教育委員会 中井 康友氏 愛知県立ひいらぎ特別支援学校中学部主事 池田 真悟氏 当事者家族 荒木 尚美氏 健康科学部福祉工学科情報工学専修4年 川角香南子氏 半田市障がい者相談支援センター 法安 佐栄氏 <コメンテーター> 半田市障がい者相談支援センター センター長 加藤 恵氏 <コーディネーター> 健康科学部 准教授 宮田美和子
16:00	閉 会	
16:05	期末試験説明	「知多半島のふくし」の科目履修者を対象に期末試験。 ※nfu.jp内で出題する試験の概要を説明する。

る特別支援教育のセンター的機能についての発表となった。3人目の登壇者は当事者家族から荒木尚美氏で、登校日の1日の様子、学校選びについて、子供を見守る親としての思い、大学生との関わりを通じて子供ができるようになったこと、今後に向けた期待などが内容である。4人目の登壇者は健康科学部福祉工学科情報工学専修4年の川角香南子氏で、卒業研究で四肢麻痺児に対し学外時間を充実できるような支援としてジョイスティックマウスを顎で操作してパソコンで絵を描くことを教えた経験を発表し、学校教育以外の支援が対象児に自信をもたらす学校生活でも変化につながっていることを報告した。5人目の登壇者は半田市障がい者相談支援センターの法安佐栄氏で、事例を通じて学校生活支援で多機関やインフォーマルサービスの支援について提示し、インフォーマルサービス支援の中で学生が関われる活動について紹介があった。シンポジウムの後には約30分のディスカッションを予定した。

3. 学生へのアンケート

アンケートの質問内容は科目担当者とCOCデイ担当者それぞれが設定し、学生への実施フォーマットは科目担当者が作成した。アンケートはGoogle Formを使用

した。シンポジウム終了後にアンケート入力について説明し、COCデイの時間内で実施した。

4. 当日の実施状況

当日は、登壇者のインターネットへの接続障害などもなくタイムスケジュールに従って大きな問題なく進行することができた。シンポジウムで一部発表時間を超過してしまったこともあり、ディスカッションが十分にできず、コメンテーターから意見をもらうに留まった。

結果

COCデイ直後に実施したアンケートの結果は以下の通りである。

受講者は457名であった。学部の内訳は、社会福祉学部81名(17.7%)、教育心理(子ども発達)学部45名(9.8%)、スポーツ科学部143名(31.3%)、健康科学部59名(12.9%)、経済学部103名(22.5%)、国際福祉開発学部26名(5.8%)であった(図1)。

「COCデイはどのくらい満足されましたか。」で、5:とても満足した、1:全く満足しなかったの均等目盛での回答は、5が163名(35.7%)、4が207名(45.3%)、3が80名(17.5%)、2が5名(1.1%)、1が2名(0.4%)であった(図2)。

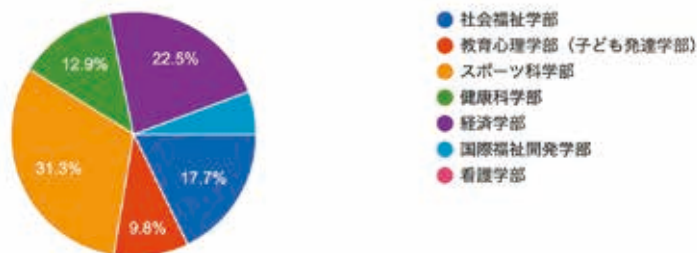


図1 COCデイ参加者学部内訳 (n=457)
国際開発学部は5.8%、看護学部は0%であった

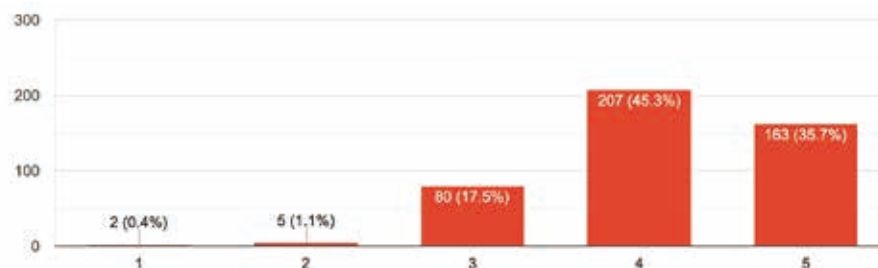


図2 COCデイにどのくらい満足したか。(n=457)
5:とても満足した、1:全く満足しなかった、での均等目盛での回答

「あなたの学業との関連性や、社会人になってから役立つ部分がありましたか。」では、5：とても役に立った、1：全くなかったの均等目盛での回答は、5が193名(42.4%)、4が199名(43.5%)、3が57名(12.5%)、2が7名(1.5%)、1が1名(0.2%)であった(図3)。

「COC デイを受講する前に、インクルーシブ教育について知っていましたか。」では、5：良く知っていた、1：全く知らなかったの均等目盛での回答で、5が61名

(13.6%)、4が91名(19.9%)、3が74名(16.8%)、2が112名(24.5%)、1が116名(25.4%)であった(図4)。

「COC デイを受講して、インクルーシブ教育について理解できましたか。」に対し、5：とても理解できた、1：全く理解できなかったの均等目盛での回答は、5が120名(26.3%)、4が218名(47.7%)、3が111名(24.3%)、2が7名(1.5%)、1が1名(0.2%)であった(図5)。

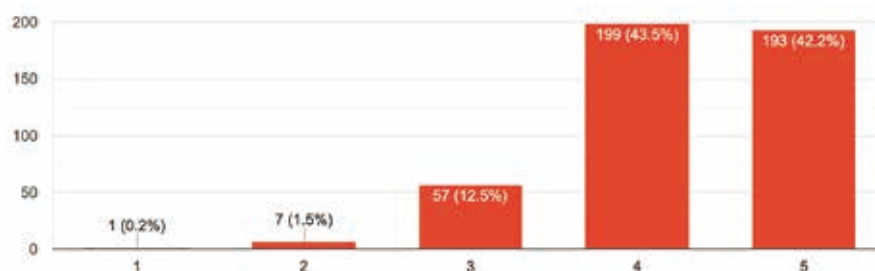


図3 あなたの学業との関連性や、社会人になってから役立つ部分がありましたか。(n=457)
5：とても役に立った、1：全くなかった、での均等目盛での回答



図4 COC デイを受講する前に、あなたは「インクルーシブ教育」について知っていましたか。(n=457)
5：良く知っていた、1：全く知らなかった、での均等目盛での回答

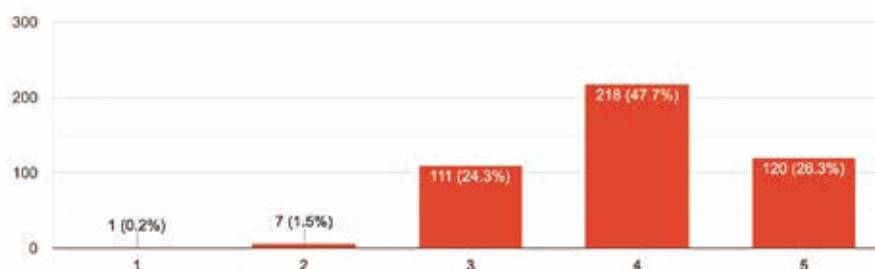


図5 COC デイを受講して、あなたは「インクルーシブ教育」について理解できましたか。(n=457)
5：とても理解できた、1：全く理解できなかった、での均等目盛での回答

「COC デイを受講して、将来、『教育や福祉（ふくし）』に関連する仕事に関わりたいという気持ち（若しくは興味）は強まりましたか。」に対し、5：とても強まった、1：全く強まらなかったの均等目盛での回答は、5が129名（28.2%）、4が185名（40.5%）、3が119名（26.0%）、2が16名（3.5%）、1が8名（1.8%）であった（図6）。

「大学生になってから、あなたは『福祉（ふくし）』に関する活動（アルバイトやボランティアなど）に、関

わっていますか。」に対し、現在、定期的に関わっているが42名（9.2%）、現在、時々関わっているが62名（13.6%）、現在は関わっていないが以前関わったことはあるが172名（37.6%）、一度も関わったことがないが179名（39.2%）であった（図7）。

「自身の『専門性や特技・趣味』を活かして実際に地域で活動してみたいですか。」に対し、関わってみたいが302名（66.1%）、関わりたくないが10名（2.2%）、どちらも言えないが145名（31.7%）であった（図8）。

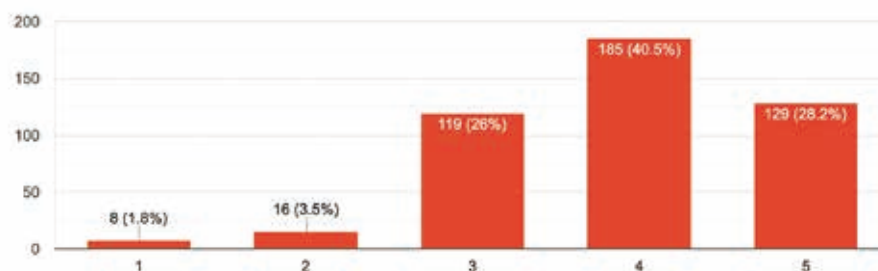


図6 COC デイを受講して、将来、「教育や福祉（ふくし）」に関連する仕事に関わりたいという気持ち（若しくは興味）は強まりましたか。（n=457）

5：とても強まった、1：全く強まらなかった、での均等目盛での回答



図7 大学生になってから、あなたは「福祉（ふくし）」に関する活動（アルバイトやボランティアなど）に、関わっていますか。（n=457）

「高校生の時に災害ボランティア（障害者支援）に参加したことがある」が0.2%、「高校の時に授業として福祉について学んだ」が0.2%であった。

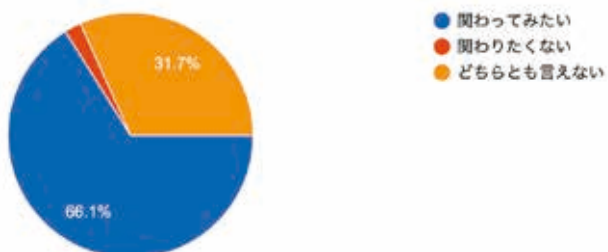


図8 自身の「専門性や特技・趣味」を活かして実際に地域で活動してみたいですか。（n=457）

「関わりたくない」の回答は2.2%であった。

「今後、半田市の『福祉（ふくし）』に関連する活動案内を希望される場合は選択ください。E-mailでご案内します。」に対して、活動案内を希望するは60名（13.1%）、活動案内は希望しないは397名（86.9%）であった（図9）。

「COC デイで主にどのような事を学びましたか。」の感想を含めた自由記載のテキストマイニングでは、学ぶ、インクルーシブ教育、福祉、ふくし、障がい、合理的配慮、関わるなどの単語が多く使用されていた（図10）。自由記載から一部を抜粋すると、「実際の話ばかり聞けたので、どんな取り組みがされているか分かって、福祉がどうあるべきかを自分で考え自分でもできることはあると感じた。」、「学生の話もあったので、自分達と同じように学習している人がどういったことをしているのかわかり、より一層こういった分野に対する意識が向上した。」、「経済学部では、あまりこのようなジャンルについて深く学ぶ機会が少ないので、非常に有意義な時間を過ごせた。」、「みんな違ってみんないいとい

う言葉を改めてその通りだと感じた。誰しもがその個性を活かして過ごすことができるような環境を作っていくこと。その重要性を学んだ。」、「家族支援の部分で『障害について勉強している学生と当事者がこんなに近くにいるのに、関わらないどころかお互いの存在を知らないというのはもったいない』という言葉が印象に残りました。お互いWIN-WINな関係になることが大切だと感じました。」などの多くの記述があった。

考察

今回、COC デイの参加者アンケートの結果、想像以上に反響が良かった。この理由は、事前からの準備を丁寧に行ってきた結果と考える。特にテーマ設定や学生の学びの軸を定めるところまでは、基調講話者とシンポジストとやり取りを繰り返し、発表者全員の共通認識として今年度のテーマと学びの軸をしっかりと作りあげることができたことにより、登壇者が軸に対してどの角度から講演するのが明確になったと考える。登壇者

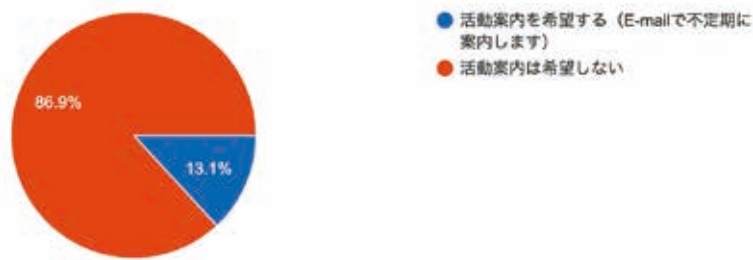


図9 今後、半田市の「福祉（ふくし）」に関連する活動案内を希望しますか。(n=457)

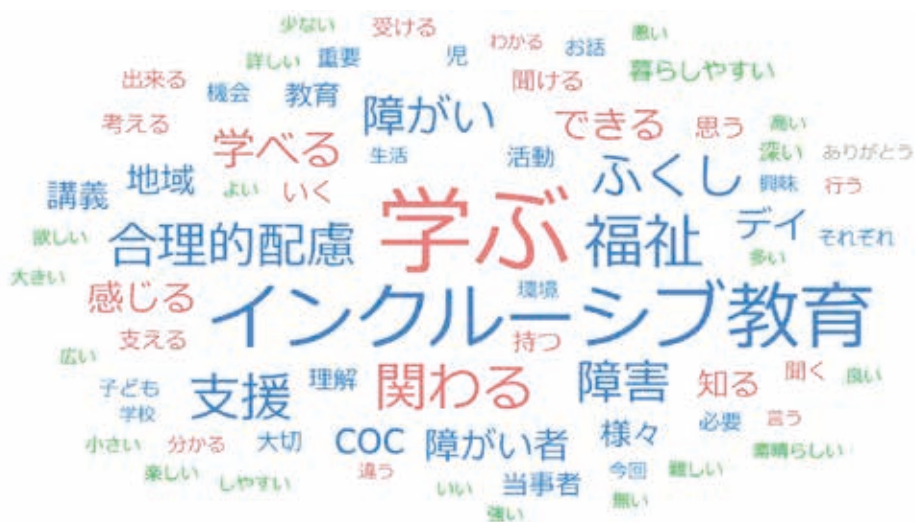


図10 COC デイで主にどのような事を学んだか (n=457)

全員と丁寧に作り上げていったことがCOCデイ全体としての学生の理解と満足度を高める結果につながったと考える。

しかし限られた準備期間や予算の中で基調講話とシンポジストを決めてプログラムを検討し登壇者と内容などを調整することには非常に多くの労力を要した。特に登壇者全員を決定するのに時間を要した結果、登壇者のプレゼン準備期間が短くなってしまったことは反省点である。直前まで最終調整を繰り返すことになった。しかし登壇者の協力を得て、最終的にプログラムとしては流れのあるものになったと考える。シンポジウムに限らず、今回のテーマとした学校教育支援では限られた時間の中で細かな調整をする場面は多くある。共に協力し合う一機関としても、日頃からの協力関係、信頼関係を形成しておくことが重要である。

今回のテーマは一部の学部の学生では、自身の専門性とつなげて理解するのが困難ではないかと感じていたが、自由記載の感想欄で「普段の講義で学べない『ふくし』について学べて良かった」といったコメントも複数あり、一定数の学生は日本福祉大学に入学したからこそ、自身の専門領域と「ふくし」の両方の学びを求めていることを改めて理解できた。また今回、66.1%が自身の強みを生かすなどした「ふくし」に関わってみたいと感じたにも関わらず、実際にボランティアなどの案内の送信を希望しない学生が86.9%であった(図8, 9)。関わりたいと感じた気持ちを実際にボランティア活動に参加するなどの実践につなげるような学生へのサポートも必要と考える。

まとめ

今回のCOCデイでインクルーシブ教育の理解、多職種連携やインフォーマルサービス支援の重要性について事例を通じて学びを深めることができ、参加学生の多くが「ふくし」への関心を高めることができたのはCOCデイの効果である。一方で、「ふくし」に関する活動への参加希望については消極的であったため、実践につながるような支援が課題である。全学教育センター、各学部での座学を実践場面で活かせるような教育支援が必要と考える。

COCデイの効果は高かったが、一方でCOCデイの準備にかかる負担が大きいのも課題の一つと考える。

- *1 日本福祉大学での「ふくし：ふつうの 暮らしの しあわせ」を使用し平仮名表記とする。
- *2 COCデイが半田市での取り組みの紹介であり、半田市の条例に準じて障害を「障がい」と表記している。
- *3 COCデイに登壇者の所属については2021年度のものである。

謝辞

ご多忙の中、学生への教育への理解を示しCOCデイへの協力を快諾下さり、また細やかなところまで準備や調整をして下さった講演者、シンポジストの皆様には深謝いたします。また準備段階で細々としたところまで配慮して下さった全学教育センターのCOCデイ担当者、COCデイ当日に半田キャンパスからZoom配信されたシンポジストに対応して下さいました半田事務室の担当者に感謝いたします。

参考文献

- 1) 文部科学省ホームページ：地(知)の拠点整備事業。
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/index.htm
- 2) 日本福祉大学ホームページ：COCサイト。
<https://www.n-fukushi.ac.jp/coc/>